

上村泰裕・久世律子編

山梨県南アルプス市におけるボランティア活動の展開
——地域社会の変容と新たなネットワークの形成——

2007 年度政策研究実習報告書

法政大学社会学部

目次

序章	関心の所在と調査の概要（上村泰裕）	1
第1章	統計から見た山梨県と南アルプス市（久世律子）	8
第2章	南アルプス市のボランティア団体の特徴（森由紀子）	40
第3章	南アルプス市のボランティア活動の担い手（山中美緒）	57
第4章	地域社会の変容とボランティア活動（跡部千慧）	72
第5章	協働の推進による地域ボランティアの展開（石田純一）	88
付録①	聞き取り調査対象団体の基礎データ	102
付録②	青年会議所が実施したアンケートの再分析結果	132
付録③	収集資料一覧	145

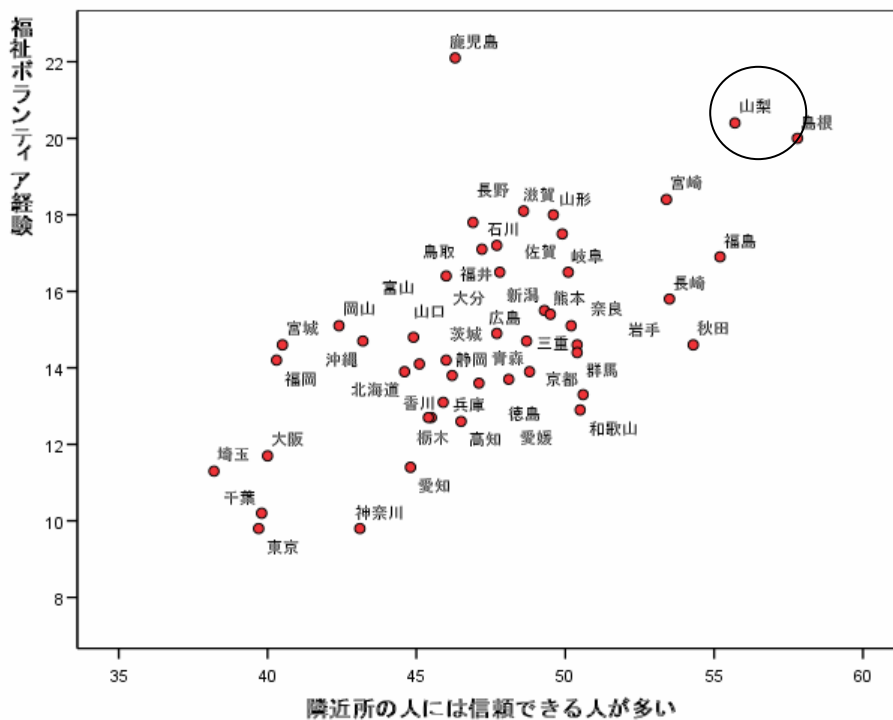
序章 関心の所在と調査の概要

上村 泰裕

1. 関心の所在

この報告書は、山梨県南アルプス市におけるボランティア活動のあり方を、ボランティア団体リーダーの方々からの聞き取り調査をもとに浮き彫りにしようとするものである。その際、地域社会の変容にともなってボランティア活動がいかなる変化を迫られているか、またそれとは逆に、ボランティア活動が地域社会をどのように変化させる可能性を秘めているのか、といったことも探究してみたい。もとより学生が主体となって行なった調査であるから、それほど権威ある報告書ということではできない。しかし、小さな子どもの目にも大人社会の夢や苦悩の一端が映し出されることがあるように、ほんの数日を南アルプスで過ごしただけのわれわれ旅行者の観察が、当事者の皆さんの意識していない特徴や問題点を思いがけず捉えることもないとは限らない。「まあ、そんな見方もできるかな」というくらいの、気楽な感じでお読みいただければ幸いである。

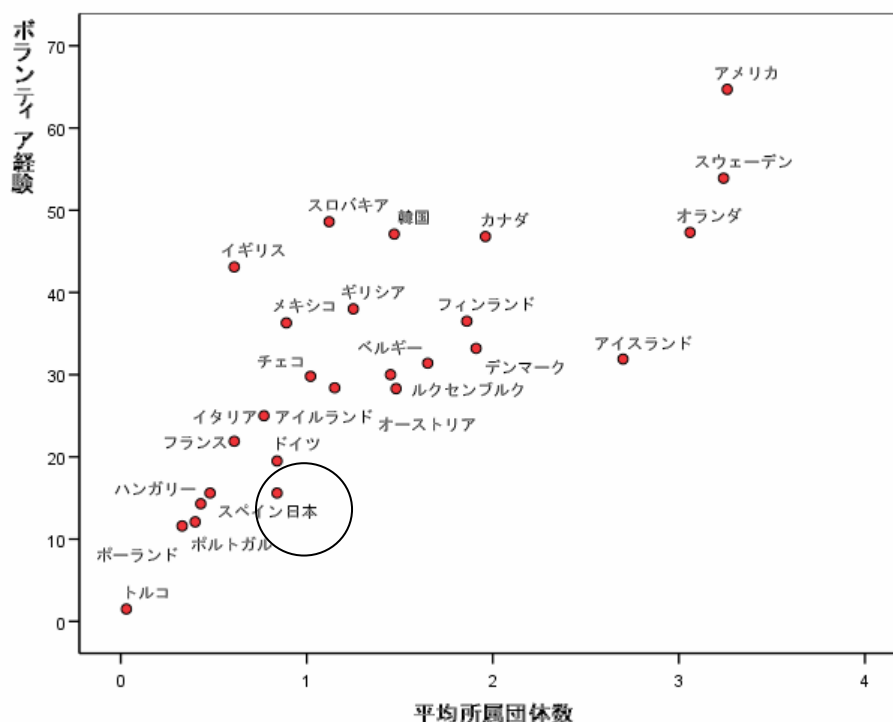
図序-1 ボランティア活動の都道府県比較



データ出所) 縦軸…総務省統計局「社会生活基本調査」(2001年)。横軸…NHK放送文化研究所「全国県民意識調査」(1996年)。いずれも内閣府(2004)より引用。

なぜ山梨県のボランティア活動に注目するのか。それは、全国的に見て山梨県がボランティア活動の盛んな土地だからである。図序-1 を見ると、「隣近所の人には信頼できる人が多い」と感じている人が多い県ほど、ボランティア活動が盛んなことがわかる。もちろん、人口密度の低い「田舎」の県にそうした傾向があるのは当然だが、それだけではない。人口密度の低い県のなかでも、山梨県は群を抜いてボランティア活動が盛んである。その背景には、社会学者がソーシャルキャピタル（パットナム 2006）と呼ぶ要因があるのではないか。ソーシャルキャピタルとは、人と人とのつながりの豊かさのことである。つながりの豊かさが信頼感を生み、助け合いを容易にしている可能性がある。もっとも、多くの人は、最近の日本では人と人とのつながりが希薄になったと感じているだろう。国際比較で見ても、日本人のボランティア参加率は決して高いほうではない（図序-2）。そうしたなかで、山梨県のボランティア活動には何か秘訣があるのだろうか。それを探りたい。

図序-2 ボランティア活動の国際比較



データ出所) World Values Survey 1999-2002 (OECD, *Society at a Glance 2005* に掲載).

ところで、なぜ山梨県のなかでも南アルプス市なのか。じつをいうと、当初それほど深い理由があって調査地を選んだわけではなかった。昨年度の調査合宿（2006年9月）では、「地域福祉計画」策定過程の実例を調べるために、大学からそれほど遠くない南アルプス市を選んだに過ぎなかった。ところが、最初に協力依頼の手紙を差し上げた南アルプス市保健福祉部（当時）の河野敏直さんが大変親切に対応して下さり、戸栗すず子さんや斉藤節子さんなど、南アルプス市の地域福祉を担うキーパーソンたちを紹介していただいた。

このときのつながりがあったので、今回のボランティア団体リーダーに対する聞き取り調査が可能になったのである。宿泊先の「樹園」の温泉にとっぷりと浸かり、近所のおじさんたちの親しげな世間話に耳を傾けながら、この調査そのものが南アルプス市の豊かなソーシャルキャピタルに支えられていることを実感した次第である。

2. 本報告書の構成

ここで、以下の各章の構成を紹介しよう。執筆前に時間をかけて討論を行なったので外見的にはそれなりの統一感があるが、基本的には調査実習に参加した学生が自力で書き上げたものである。仔細に見れば、相互矛盾やおかしな主張も皆無とはいえないことをあらかじめお断わりしておく。また、細心の注意を払ったつもりではあるが、なお聞き違いや事実誤認、不穏当な解釈、無礼な表現が残っているかもしれない。読者の御寛恕を乞う。

さて、第1章の久世論文「統計から見た山梨県と南アルプス市」は、聞き取り調査の前提として、既存統計を用いた分析から山梨県と南アルプス市の特徴を描き出している。山梨県では人の移動が少ないため、ボンディング型のソーシャルキャピタル（地域の団結力）が発達しやすい。この傾向は南アルプスで一層顕著だという。団結力はプラスに働けばボランティア活動となり、マイナスに働けば新住民に対する排他性となるだろう。

第2章の森論文「南アルプス市のボランティア団体の特徴」は、ボランティア団体の性格に注目する。聞き取り調査に応じて下さった団体の特徴からヒントを得て、「地域貢献型」「理念追求型」「福祉支援型」「相互交流型」という、ボランティア団体の4類型を提示する。さらに、若い世代を地域のボランティア活動に呼び込むためには、手はじめに行政や社協が相互交流型の活動をコーディネートすることが有効ではないかと述べる。

第3章の山中論文「南アルプス市のボランティア活動の担い手」は、ボランティア活動を担う「人」に注目する。団体リーダーの経歴を分析することで、「地元有力者型」「地元若者型」「転入参加型」「分野特定型」という、ボランティア活動の担い手の4類型を提示する。さらに、マッハー（地元の顔役。おじさんが多い）とシュムーズ（おしゃべりを楽しむ人。おばさんが多い）の両方が活動に貢献していることを明らかにする。

第4章の跡部論文「地域社会の変容とボランティア活動」は、南アルプスの地域社会に焦点を当てる。いかなる地域社会がボランティア活動を支えているのか。市内を「旧村地区」「混住地区」「新興住宅地区」の3類型に分けて考察し、南アルプスでも農村型の堅固なソーシャルキャピタルが揺らぎ、都市型の開かれたソーシャルキャピタルが形成されつつあること、さらに、ボランティア活動が後者の形成に寄与しうることを指摘する。

第5章の石田論文「協働の推進による地域ボランティアの展開」は、地域社会の活性化を図るうえで市民と行政の「協働」が重要だと述べる。先行研究から「対等型」「行政主導型」「市民主導型」という協働の3類型を抽出した後、南アルプスにおける協働論議を検討する。さらに、後継者の不足、交流の不足、財源の不足、世代間の意識の違いといったボランティア活動をめぐる諸問題も、協働を進めることで解決可能だと主張する。

付録として、①聞き取り調査対象団体の基礎データ、②青年会議所が実施したアンケート

トの再分析結果、③収集資料一覧、を掲載した。それぞれ参考にしていただければ幸いである。

3. 調査の概要

2007年9月に実施した聞き取り調査の詳細を説明する前に、2007年度一年間の勉強の過程を記録しておきたい。

- 4月12日 オリエンテーション。
- 4月19日 統計分析の説明、ザイゼル『数字で語る』10章講読。
- 4月26日 SPSSによる散布図の描き方、パットナム『孤独なボウリング』1・3章講読。
- 5月10日 散布図実習、パットナム『孤独なボウリング』6・7章講読。
- 5月17日 渋川智明『福祉NPO』講読（自主ゼミ）。
- 5月24日 散布図実習、パットナム『孤独なボウリング』8・14章講読。
- 5月31日 散布図実習、パットナム『孤独なボウリング』20・22章講読。
- 6月14日 川喜田二郎『発想法』講読。
- 6月21日 調査仮説の検討、マートン「社会学理論の経験的調査に対する意義」講読。
- 6月28日 調査仮説の検討、マートン「経験的調査の社会学理論に対する意義」講読。
- 7月5日 依頼状の書き方。小池和男『聞きとりの作法』2章、メイ『社会調査の考え方』6章講読。
- 7月12日 質問項目案の検討。きだみのる『気違い部落周游紀行』、メイ『社会調査の考え方』7章講読。
- 7月13日 斉藤節子氏・中澤まゆみ氏（南アルプス市社会福祉協議会）、飯野多恵子氏・長澤廣秋氏（南アルプス市市民活動センター）を訪問し、調査への協力を要請（上村）。
- 7月14日 箕浦一哉氏（環境社会学者、山梨県立大学准教授、南アルプス市みんなでまちづくり推進会議委員）を訪問（上村）。
- 7月19日 質問項目案の検討。
- 7月29日 南アルプス青年会議所主催のボランティア交流会に参加（上村、森、跡部）。
- 8月2日 補講…質問項目案および「みんなでまちづくり推進会議」報告書の検討。仁平典宏「「ボランティア」とは誰か」講読。
- 9月10日 調査打ち合わせ。
- 9月11～13日 聞き取り調査実施（詳細は別掲）。
- 9月20日 調査ノート整理。
- 9月27日 基礎データ報告（森、山中）、戸田山和久『論文の教室』1～4章講読。
- 10月4日 基礎データ報告（跡部、石田）、戸田山和久『論文の教室』5～8章講読。
- 10月11日 団体に関するKJ法分析。

- 10月18日 リーダーに関するK J法分析。
- 10月25日 リーダーに関するK J法分析。
- 11月8日 地域に関するK J法分析。
- 11月15日 地域福祉に関する論文講読（久世）。
- 11月22日 研究報告（石田）。
- 11月29日 研究報告（森）。
- 12月6日 研究報告（山中）、青年会議所アンケート再分析（久世）。
- 12月13日 研究報告（跡部）。
- 12月20日 報告書編集打ち合わせ。
- 1月10日 原稿読み合わせ。

さて、9月に実施した聞き取り調査では、南アルプス市社会福祉協議会と南アルプス市市民活動センターの御協力をいただき、それぞれの登録団体から3団体ずつ紹介していただいた。このような調査方法を採った結果として当然のことながら、選ばれたのは社協や市民活動センターと良好な関係にある熱心な団体に限られている。そうした「バイアス」はあるが、南アルプス市のボランティア活動の最良の一側面を捉えることはできたと思う。

調査日程は以下のとおりである。なお、各団体の調査協力者の氏名やプロフィールについては、2章と3章、および付録①の基礎データを御参照いただきたい。

9月11日（火）

14:00～16:00（社会福祉協議会にて）男性ボランティア米作塾

9月12日（水）

8:40～9:20（樹園にて）金丸ち江じ氏

10:00～12:00（社会福祉協議会にて）録音・朗読ボランティアはなしんぼ

（市民活動センターにて）南アルプスファームフィールドトリップ

14:00～16:00（社会福祉協議会にて）精神保健福祉ボランティアこぶしの会

（市民活動センターにて）教育ボランティア虹の会

9月13日（木）

10:00～12:00（市民活動センターにて）楡形環境とリサイクルの会

お世話になった方々に感謝の言葉を申し述べなければならない。まず、南アルプス市で最初にわれわれを受け入れて下さった南アルプス市役所の河野敏直さん。この地のボランティア活動の豊かさを垣間見せて下さった戸栗すず子さんをはじめとして、昨年度の調査に協力して下さいました。また、今年度の聞き取り調査に全面的に御協力いただいた、南アルプス市社会福祉協議会の斉藤節子さんと中澤まゆみさん、南アルプス市市民活動センターの飯野多恵子さん、長澤廣秋さん、駒井春美さん。ありがとうございました。さらに、

5章で紹介される「みんなまち会議」の委員を務めた山梨県立大学の箕浦一哉先生からは、南アルプス市の地域社会を理解するための重要なヒントをいくつもいただいた。箕浦先生とは全く面識がなかったにもかかわらず、同世代で同郷の同業者ということで大変お世話になっただけでなく、宿泊先の「樹園」でのバーベキューにもお付き合いいただいた。

市民活動センターの長澤さんの御案内で、2007年7月29日に開催されたボランティア交流会（南アルプス青年会議所主催）に参加できたことも非常に有意義だった。そこで行なわれた山梨県立大学の市原実先生の講演からも、多くのことを学ばせていただいた。また、みんなまち会議の副会長も務められた櫻田清さん、この報告書のなかで何度もお名前が登場する名取英雄さん、南アルプス青年会議所の三枝洋さんと金丸博樹さんをはじめとして、多くの方々にお会いすることができた。9月の調査の合間に金丸博樹さんのお宅を訪ね、金丸さんとその父上から消防団の話をついたことも印象に残っている。消防団という屈強のボランティア活動については、まだきちんとした社会学的研究は行なわれていない。いつか取り組んでみたいテーマである。

長時間にわたる聞き取り調査に快く応じて下さった、ボランティア団体リーダーの皆さんに心から感謝申し上げたい。まず、男性ボランティア米作塾の金丸忠仁さんと小野友宏さん。金丸さんにはお仕事である花栽培の温室も見せていただいた。また、金丸さんの母上の金丸ち江じさんには、1978年の山梨県ボランティアセンターの設立をきっかけとして、それまでの婦人会を中心とした奉仕活動が地域のボランティア活動に発展していく様子を語っていただいた。当時の貴重な写真も見せていただき、地域社会の歴史を実感することができた。それから、録音・朗読ボランティアはなしんぼの水上市美里さんと上野恵美子さん、NPO法人南アルプスファームフィールドトリップの小野隆さん。小野隆さんからは、美味しいジャムもいただいた。さらに、精神保健福祉ボランティアこぶしの会の望月敬子さん、教育ボランティア虹の会の皆さん、楡形環境とリサイクルの会の齊藤尚子さん。どうもありがとうございました。

ティーチングアシスタントとして参加してくれた、法政大学大学院社会学研究科博士課程の久世律子さん。久世さんは、専門外にもかかわらず熱心に参加し、学生諸君に適切な助言をしてくれた。この報告書の編集作業も、久世さんの助力なしにはとても終わらなかつたろう。また、上智大学大学院博士課程の石田健太郎さんは、車の運転を買って出してくれた。石田さんは南アルプス市で介護労働に関する独自の聞き取り調査を行なったが、今後発表されるその成果に期待したい。

最後に、法政大学社会学部で社会調査教育を担当している先生方、とりわけ船橋晴俊先生と池田寛二先生に感謝申し上げたい。社会学部では2005年11月に、調査実習のコツを若手教員に伝授するための座談会を開催した（法政大学社会学部編2006）。このときの多くのアドバイスがなければ、学生を引き連れての調査旅行など企画しようという勇氣は湧いてこなかつたに違いない。南アルプス調査は、私にとっては実習の実習でもあった。社会学部教授会のソーシャルキャピタルの豊かさにも感謝して筆を擱くことにしたい。

文献

- 内閣府『ソーシャル・キャピタル——豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』（2004年）
ロバート・D・パットナム『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』（柏書房、2006年）
法政大学社会学部編『フィールド型調査実習の可能性——社会調査士資格取得を前提とする「望ましい教育と研究のあり方」をめぐって（座談会記録）』（法政大学社会学部、2006年）

政策研究実習参加者名簿

- 山中美緒（社会学部社会学科2年）
跡部千慧（社会学部メディア社会学科3年）
石田純一（社会学部社会政策科学科3年）
森由紀子（社会学部社会政策科学科3年）
久世律子（大学院社会学研究科博士課程、TA）
上村泰裕（法政大学社会学部准教授）

上村泰裕・久世律子編

山梨県南アルプス市におけるボランティア活動の展開
——地域社会の変容と新たなネットワークの形成——

2007年度政策研究実習報告書

2008年3月13日 印刷・発行

法政大学社会学部 上村泰裕研究室

194-0298 東京都町田市相原町4342

e-mail fwhs4794@mb.infoweb.ne.jp